

平成 10 年度厚生科学研究費補助金

(厚生科学特別研究事業)

日本語を母語とする聴者の  
日本手話の学習過程に関する研究

研究代表者：木村晴美

(国立身体障害者リハビリテーションセンター)

## 総括研究報告書

日本語を母語とする聴者の日本手話の学習過程に関する研究

主任研究者：木村晴美 国立身体障害者リハビリテーションセンター  
学院教官

### 研究要旨

日本手話は視覚言語であり、単語や文法などの体系が異なるばかりでなく、聴覚言語である日本語とは、大きく異なっていることが知られている。本研究は、日本手話を効率的に学習できるようなカリキュラムを作成することを目的に、現在日本手話を学習している聴者を対象に、シャドウイングの手法を用いて、その習得の過程を明らかにしようとした。その結果、次のことがわかった。

- (1) 日本手話を第2言語として学習した聴者と、それを第1言語とする聾者の誤りには、質的に大きな違いがあった。
  - (2) 単語を表現する手指動作では、音韻の誤りが主であった。
  - (3) 単語を表現するための使われる顔の表情の習得には、1年位必要であった。
  - (4) 文法を表現する頭等の動きの習得はかなり困難で、習得していない学習者がおおく見られた。
- 今後は本研究の結果を活用して、日本手話教育のカリキュラムを作成していく。

### A. 研究目的

日本手話は視覚言語であり、単語や文法などの体系が聴覚言語である日本語とは大きく異なっていて、日本語を母語として成長した聴者が、日本手話を学習するのは大変難しい。本研究は、日本手話を効率的に学習できるようなカリキュラムを作成するための第一着手として、現在、日本手話を学習している聴者の学習によるその習得の過程を明らかにすることを目的とする。その研究の成果が、当センター学院のみならず、国内の手話講座などの手話通訳養成プログラムでも活用されれば、日本手話で手話通訳できる通訳士は増加し、聾者が社会生活をおくる上でのコミュニケーションがきわめてスムーズになろう。さらに、高等教育に対応できる日本手話の通訳者を養成できるようになれば、現状ではきわめて難しい状況にある大学等の高等教育への進学が可能となり、専門職種への就業の可能性も開け、聾者が社会参加する上で大きく寄与することにもなる。

### B. 研究方法

日本語を母語として成長した聴者が、日本手話を習得するためには、日本手話の単語や文法の体系が、日本語のものとは大きく異なっているため、それらを順次学習する必要がある。しかし、それだけではなく、顔の表情や視線の動き・頭などの上体の動きの変化が、日本手話を表現していく上では、大変重要になる。これらは、日本語を表現する上では、普通、重要な言語的意味をもたないため、意図的な調節がなされていない。これらを見逃さずに、適切にまねることができるようになることも、日本手話を習得する上では、不可欠である。日本手話の単語や文法の習得の過程と併せて、以上のような日本手話に特有な事情をどのように習得していくかについて、解明できるよう、次のように研究を行う。

#### (1) 評価の方法

評価方法には、外国語学習で多用されるシャド

## (別添 2)

ウイングという方法を用いる。

まず、日本手話の短いお話を収めた評価用の日本手話の題材を用意し、聾者にそれらを発話してもらい、ビデオ録画した。様々な段階にある手話学習者に、そのビデオ録画された日本手話の表現を、できるだけまねしてもらい、それを記録して、日本手話のどの側面が同じように再生（模倣）できていて、どの側面が再生（模倣）できていないかによって、評価した。

### (2) 対象者

日本手話をはじめて学習する3ヶ月目・6ヶ月目・1年目・2年目・3年目の学習者を対象とした。また、比較のためのコントロール群として、聾者を対象とした同様の実験を行なった。

### (3) 評価項目

日本手話の学習者が、目標とする一連の流れの日本手話を正しく模倣ができていないか・出来ていないかの評価は、日本手話を母語とする聾者が行なった。また、評価したのは次の各項目であった。

- ① 単語を表現する手指動作
- ② 単語を表現する顔の表情や口形の表現
- ③ 文法を表現する頭の動き
- ④ 日本手話に独特な単語 PT3 (3人称代名詞) の表現のしかた

## C. 結果と考察

現在、まだ分析作業を続けている段階であるが、これまでに次のようなことがわかってきている。

(1) 日本手話を母国語とする聾者では、単語が別の類語になるといったような誤りがおもであったに対し、日本手話学習者では文法や語彙表現の誤りが主であった。

(2) 単語を表現するための手指動作に関して、学習の初期において音韻的誤りが生じていた。

(3) 単語を表現するための必要な顔の表情の習得は、手指動作の習得に比べると遅い傾向があった。

(4) 文法を表現する頭の動きについては、本研究の結果から見るとその習得がかなり難しく、多く

の学習者で誤っていた。新たに学習方法を考案する必要があるように思えた。

今後、さらに詳細な分析を継続し、集計し、その結果から、日本手話教育のカリキュラムを作成していくことを計画している。

## D. 結論

現在日本手話を学習している聴者を対象に、シャドウイングの手法を用いて、日本語を母語とする聴者の日本手話の学習過程を明らかにした。その結果から、学習の過程を予測出来るようになり、また、必要とされる学習項目もわかった。今後は本研究の結果を活用して、日本手話教育のカリキュラムを作成していく。

## E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

## F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし

## 分担研究報告書

日本語を母語とする聴者の日本手話の学習過程に関する研究

分担研究者：木村晴美（国立身体障害者リハビリテーションセンター学院教官）

市田泰弘（国立身体障害者リハビリテーションセンター学院教官）

福田友美子（感覚機能系障害研究部聴覚言語障害研究室長）

### 研究要旨

日本手話は視覚言語であり、単語や文法などの体系が異なるばかりでなく、聴覚言語である日本語とは、大きく異なっていることが知られている。本研究は、日本手話を効率的に学習できるようなカリキュラムを作成することを目的に、現在日本手話を学習している聴者を対象に、シャドウイングの手法を用いて、その習得の過程を明らかにしようとした。その結果、次のことがわかった。

- (1) 日本手話を第2言語として学習した聴者と、それを第1言語とする聾者の誤りには、質的に大きな違いがあった。
- (2) 単語を表現する手指動作では、音韻の誤りが主であった。
- (3) 単語を表現するための使われる顔の表情の習得には、1年位必要であった。
- (4) 文法を表現する頭等の動きの習得はかなり困難で、習得していない学習者がおおく見られた。

今後、さらに詳細な分析を継続し、集計し、その結果から、日本手話教育のカリキュラムを作成していくことを計画している。

### A. 研究目的

先天性の聴覚障害者で構成されるコミュニティ（聾社会）では、独特の体系を持つ手話言語（いわゆる日本手話）が伝統的に使われている。しかし、手話通訳者の多くは、現在、話し言葉をもとにして作られた日本語対応手話を使用している。これに対して、若い世代の聾者は、日本手話による手話通訳を実施してほしいという要望が強い。一方、アメリカ合衆国では、聾者の手話言語であるアメリカ手話を対象にした言語研究が1960年代に開始され、アメリカ手話の言語学的体系が明らかにされてきた。それらの研究成果をふまえて、そのような手話が言語の一種として認識され、通訳の場でも使用されるようになった。日本でも早急にそのような状況を実現する必要があるが、そのためにはまず、日本手話を学習できるような環境を整えなくてはならない。

日本手話は視覚言語であり、単語や文法などの

体系が聴覚言語である日本語とは大きく異なっていて、日本語を母語として成長した聴者が、日本手話を学習するのは大変難しい。本研究は、日本手話を効率的に学習できるようなカリキュラムを作成するための第一着手として、現在、日本手話を学習している聴者の学習によるその習得の過程を明らかにすることを目的とする。その研究の成果が、当センター学院のみならず、国内の手話講座などの手話通訳養成プログラムでも活用されれば、日本手話で手話通訳できる通訳士は増加し、聾者が社会生活をおくる上でのコミュニケーションがきわめてスムーズになろう。さらに、高等教育に対応できる日本手話の通訳者を養成できるようになれば、現状ではきわめて難しい状況にある大学等の高等教育への進学が可能となり、専門職種への就業の可能性も開け、聾者が社会参加する上で大きく寄与することにもなる。

## B. 研究方法

日本語を母語として成長した聴者が、日本手話を習得するためには、日本手話の単語や文法の体系が、日本語のものとは大きく異なっているため、それらを順次学習する必要がある。しかし、それだけではなく、顔の表情や視線の動き・頭などの姿勢の変化が、日本手話を表現していく上では、大変重要になる。これらは、日本語を表現する上では、普通、重要な言語的意味をもたないため、意図的な調節がなされていない。これらを見逃さずに、適切にまねることができるようになることも、日本手話を習得する上では、不可欠である。日本手話の単語や文法の習得の過程と併せて、以上のような日本手話に特有な事情をどのように習得していくかについて、解明できるよう、次のように研究を行う。

### (1) 評価の方法

評価方法には、外国語学習で多用されているシャドウイングという方法を用いる。

まず、日本手話の短いお話を収めた評価用の日本手話の題材を用意する。聾者にそれらを発話してもらい、ビデオ録画する。様々な段階にある手話学習者に、そのビデオ録画された日本手話の表現を、できるだけまねしてもらい、それを記録して、日本手話のどの側面が同じように再生（模倣）できていて、どの側面が再生（模倣）できていないかによって、評価を行う。また、併せて、内容について日本語で表現してもらい、理解の程度も評価する。

### (2) 対象者

日本手話をはじめて学習する3ヶ月目の学習者15人・6ヶ月目15人・1年目15人・2年目の学習者4人・3年目の学習者4人を対象とした。また、比較のためのコントロール群として、聾者7人を対象として同様の実験を行なった。

### (3) 評価項目

日本手話の学習者が、目標とする一連の流れの日本手話を正しく模倣ができていないか・出来て

いないかの評価は、日本手話を母国語とする聾者がおこなった。また、評価の対象としたのは次の各項目であった。

- ① 単語を表現する手指動作
- ② 単語を表現する顔の表情や口形の表現
- ③ 文法を表現する頭の動き
- ④ 日本手話に独特な単語 PT3 (3人称代名詞) の表現のしかた

## C. 結果と考察

現在、まだ分析作業を続けている段階であるが、これまでに次のようなことがわかってきている。

(1) 日本手話を母国語とする聾者では、単語が別の類語になるといったような誤りがおもであったに対し、日本手話学習者では文法や語彙表現の誤りが主であった。

(2) 単語を表現するための手指動作に関して、学習の初期において音韻的誤りが生じていた。

(3) 単語を表現するための必要な顔の表情の習得は、手指動作の習得に比べると遅い傾向があった。

(4) 文法を表現する頭の動きについては、本研究の結果から見るとその習得がかなり難しく、多くの学習者で誤っていた。新たに学習方法を考案する必要があるように思えた。

今後、さらに詳細な分析を継続し、集計し、その結果から、日本手話教育のカリキュラムを作成していくことを計画している。

## D. 結論

現在日本手話を学習している聴者を対象に、シャドウイングの手法を用いて、日本語を母語とする聴者の日本手話の学習過程を明らかにした。その結果から、学習の過程を予測出来るようになり、また、必要とされる学習項目もわかった。今後は本研究の結果を活用して、日本手話教育のカリキュラムを作成していく。

(別添 3)

E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし